

## [論 文]

# 英国人外交官 W.G. アストンが高く評価した 貝原益軒の道德教育論の特質

—“A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE” を資料として—

土 井 進<sup>\*</sup>

## 要 旨

英国人外交官 W.G. アストンが“A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE”『日本文学史』において、貝原益軒の道德教育論を高く評価している。益軒の儒者としての側面よりも道德教育論の著者としての側面に着目し、郷里の筑前国をはじめ広く我が国の道德教育に大きく貢献したことを論じている。アストンが指摘した益軒の質の高い道德教育論は、いかなる儒学理解から生み出されたのかを明らかにするために、益軒の儒学研鑽の歩みを精査した。その結果、儒学への志は仲兄存齋の影響により仏教を棄てることから始まった。その後、陽明学を排し、遂には朱子学をも疑うようになったのは、そこに仏教の影響が見られたからであった。こうして純粹に儒学の研鑽に生きることを信条とした益軒の畢生の仕事は、儒学の易簡性を抛り所として児童や庶民のために、人としての在り方を教える道德教育論を書き著すことであった。

Key words : W.G. アストン, 日本文学史, 貝原益軒, 道德教育論, 儒学

## はじめに

英国人外交官 W.G. アストン (1841-1911)<sup>1)</sup> は、刻苦精励よく日本語に通達し、『日本書紀』の英訳や『日本文学史』、『日本語文法』、『神道』などを英文で著した。『日本文学史』“A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE” は、1899年にニューヨークで出版された。

本書の中でアストンが高く評価した貝原益軒<sup>2)</sup> の道德教育論の特質を明らかにするために、益軒の儒学研鑽の特色と道德教育論の発生に関連を探究した。そして、益軒にとって子どもや庶民のために道德教育論を著すことが、儒学の真髓である易簡性を実現する道であり、報恩の道に通ずるという信念を抱いていたことを明らかにした。そして、道德教育論を生涯の本懐として著したことを究明することを、本研究の目的とした。

---

<sup>\*</sup> 淑徳大学人文学部教授

## I アストンが高く評価している益軒の道德教育論

アストンは『日本文学史』において、貝原益軒を取り上げた冒頭において、“gratitude in their own country for their services to learning and good morals” (Aston 1899 : 236) と述べ、益軒が筑前国の藩主に儒臣として仕える職務を通して、藩内の武士や庶民に学問を授けることに貢献するとともに、質の高い道德教育論によって人々に貢献したことに對して、感謝されていることを明らかにしている。益軒はその生涯に道德教育に関する論文、中国古典の注釈、日本の哲学に関する論文、本草学の研究、そして紀行文など夥しい数の著書を著している。

“His sole object in writing was to benefit his countrymen; and his style, though manly and vigorous, is wholly devoid of rhetorical ornament” (Aston 1899 : 237)

しかし、益軒にとって書物を書く唯一の目的は、郷里の人たちの利益になることであつた。それで益軒の文体は、男性的で精力的ではあるが、完全に修辞上の裝飾や輕薄な言語、当代の小説家や劇作家が自由に耽るような裝飾は用いなかつた。

“He used the Kana or native phonetic script as far as possible, so as to bring his teachings down to the level of children, and ignorant people.” (Aston 1899 : 137)

彼はできるだけ仮名文字や自国の発音による手書きの文字を用いた。彼の道德教育論が子どものレベルや無学の民衆にも届くようにするためであつた。

“Yekken’s writings are full of excellent morality of a plain, common-sense description. It is hardly possible to overestimate their influence, or the servise which he rendered to his country by his teachings.” (Aston 1899 : 237)

益軒の著書には秀逸な道德性が、簡便で常識的な記述によって満ちている。それらの著書による影響や彼がその道德教育論によって郷里に尽くした貢献は、いくら評価してもし過ぎることはない。益軒が81歳で著した『和俗童子訓』は、教育に関する論文として示唆に富んでおり、今日においても出版されている。アストンが引用した『和俗童子訓』を2箇所次に紹介する。

“A boy’s education should begin from the time when he can eat rice, speak a little, and show pleasure or anger.” (Aston 1899 : 238)

小児の教育は、「はじめていひ（飯）をくひ、ものをいひ、人のおもて（面）を見て、よろこび・いかるいろ（色）をしる時より」始めるべきである。（石川謙校訂 1991 : 208）

“A tutor should be a man of upright life. A child should not be put to learn of a disreputable person, no matter how clever he may be.” (Aston 1899 : 238)

「小児に学問をおしゆるに、はじめより、人品（ひとがら）よき師を求むべし。才学ありとも、あしき師に、したがはしむべからず。」（石川謙校訂 1991 : 218）

以上のような表現による益軒像が、アストンが『日本文学史』において把握した益軒の評価であつた。益軒の儒学者としての側面よりは、道德教育論の著者としての社会的貢献度の高さとい

う側面から評価したものといえよう。

## Ⅱ 貝原益軒の読書好学の素質と敬虔真摯な天性

“三つ子の魂百までも”と言われるように、人間の精神の基本的な要素は、既に幼少期に形成されていると言っても過言ではない。益軒が85年にわたって学び続けた生涯学習の精神は、実に幼少期にその萌芽を見ることができる。そこで「益軒先生年譜」（貝原益軒 1911 益軒全集（以下全集とする）：巻1, 3）と「益軒先生伝」（全集：巻1, 11）に基づいて、彼のパーソナリティ形成の要因となっているものについて考察したい。

貝原益軒の名は篤信、字は子誠、小字は九兵衛、益軒はその号である。寛永7（1630）年11月14日、福岡城中の官舎に生まれた。父は利貞、寛斎と号し黒田侯に仕えていた。母はちくといい男ばかり5人兄弟の末であった。7歳の時の年譜には、書字の教えを受けないのに、自ら国字を知り好んで草子を読んだという。また、「益軒先生伝」には幼少の益軒が塵劫記をひとりで学び、計算に一つの誤りもなかったことを挙げている。ここに温良謹慎の特質と読書好学の天性とを、窺い知ることができる。彼の81歳の時の主著『和俗童子訓』には、「六芸のうち、物かき、算数をする事は、誠に貴賤四民ともにならはしむべし。」（全集：巻3, 177）と述べ、当時一般には卑しまれていた算数の必要性や女子教育の重要性を主張していることは卓見であり、これは幼少期の学びに起因するものと考えられよう。

## Ⅲ 貝原益軒の儒学研鑽における廃仏思想

14歳の時の年譜は、益軒がいかに敬虔真摯な仏教の信仰者であったかを示している。すなわち、「幼にして浮屠を崇むことを知り、毎日佛經を誦し佛號を念じ、毎月佛忌に当たれば、粗食して礼拝するを例とす。」（全集：巻1, 6）と、これは祖母と母が極めて敬虔な真宗の信徒であったことによる感化であろうと思われる。益軒の精神的指導者であった仲兄存齋が、益軒が10歳の時に医学を学ぶ命を受けて京都に立った。京都で医学のほか最新の学問、すなわち中世において支配的な思想であった仏教に代わって、近世の中心思想となる儒学を学んで帰った存齋が、14歳の益軒に「教ゆるに佛の崇ぶべからざるを以てす。乃ち過てるを知りて棄て、終身また佛を好ま」（全集：巻1, 6）なくなったと年譜は記し、仏教のどこが誤っているかについては一切ふれられていない。尊敬する精神的指導者、仲兄存齋の影響力がいかに大きかったかが推察される。この出来事があってから益軒は兄に随って四書を読み、「是れより始めて聖人の道尊ぶべきを知り、深く之を信ず」（全集：巻1, 6）るようになったと年譜は述べている。

その後、朱子学と陽明学の兼学が続いたのであるが、36歳の時陳献章の『学部通辨』を読んだからは、陽明学を棄てて朱子学のみに傾倒していった。その後、54歳の時に朱子の学術に関する

『朱子語類要』などを著して以後は、朱子学に関する執筆は絶えて無くなった。何故なら益軒は朱子学の研鑽を深めた結果、朱子学の根本である太極イコール無極という説が仏教や道教から出ているものであり、聖人の教えと同条共貫するものでないことを知り、朱子学への情熱を失ったからであった。彼は死の直前に『大疑録』を著し、これまで神明の如く信じてきた朱子学に対して、「思ひを罩むること三十余年なり。」(全集：巻2, 150)と疑問を投げかけている。

#### IV 神儒一致の思想のもとに儒学の実践躬行に努める

貝原氏の家系は、中世以後久しく職を備中国の吉備津宮に奉じていたといわれる。足利時代の末、曾祖父多兵衛が初めて神職を去り、祖父宗喜が黒田如水に仕え福岡に移った。これが貝原氏が黒田侯に仕えるようになった始まりである。祖父は軍旅に老け、經理の才があったので、民生と財用の事にあたったと言われている。父寛齋も純然たる武士としてではなく、祐筆として仕えていたといわれる。

益軒の儒学への志は、まず仏教を棄てることから始まった。ついで陽明学を排して朱子学に専心するも、遂には朱子学をも取捨選択して用いるべきであると、『大疑録』において明らかにした。益軒が陽明学や朱子学を批判した根拠は仏教の影響が見られることであった。しかし、孔子の教えである儒学そのものに対しては、益軒は毫も疑うことがなかった。儒学は我が国の伝統である神道と一致するものであると捉え、古学派や古文辞学派、折衷学派等の他の学統学派に傾倒することはなかった。

益軒の儒学に対する潔癖さは次のようなものであった。「天道は一のみ、故に学ぶ者は純一を貴ぶ。若し王道を行ひて覇術を雑ふる者は伯道と為す。王道に非ざるなり。儒と為りて異術を雑ふる者は異術と為す。儒に非ざるなり。程朱を学んで陸王を雑ふる者は、陸王の徒為り。程朱の学に非ざるなり。道誼を行ひて、功利を雑ふる者は、功利と為す。道誼に非ざるなり。蓋し清冽の水と雖も、苟も一点の汚穢有れば、呑むべからざるなり。」(全集：巻3, 643)

彼は聖人の教えについて、「聖經は天地、神明、人倫の道を教へ給ふ書なれば、是中夏の書なれども我国の神道の経ともなりぬべし。聖道神道かはりなし。天地の間、道は唯一のみなればなり。」(全集：巻3, 643)というように神儒一致の理解を示している。「学者當に道学の実を勤むべし。好んで道学の名を立つべからず。其の実に称はずして、一時の虚言を掠め取るは、恥ずべきの甚だしきなり。且つ、自ら負んで経術に専一なりと雖も、往往訓詁の習に止りて、未だ以て矜高を為して人を嫚罵し、抗顔にして好んで人の師と為る。方に其の量を知らずと謂ふべし。」(全集：巻2, 122)と、学統学派を主張する生き方を批判し、自らは儒学の精神を実践躬行する道を歩んでいる。

## V 益軒の本懐 — 致仕後に著した道德教育論 —

益軒は儒臣として48年の長きにわたって黒田藩の3代の大名に仕えた。この間に益軒は江戸に上ること12回、京都に上ること24回であった。このような出張の機会に彼は、東海道、美濃路などを旅行し、紀行文『東路記』貞享2（1685）年や丹波丹後若狭などを旅行した紀行文『己巳紀行』元禄2（1689）年を著し、簡明で明解な表現で記述するように努めている。益軒は元禄13（1700）年、71歳の秋に全く致仕した。公務から解放された益軒は以後14年間、専ら力を読書と著作に用い、聖人の道を求めてやまなかった。益軒を特色づける道德教育論はこの時期に出版されることによって全国に知られることになった。因みに『君子君』は74歳、『大和俗訓』は79歳、『和俗童子訓』『家道訓』『楽君』は81歳、『五常訓』は82歳、『養生訓』は84歳の時に成ったものである。益軒の主著である『慎思録』が成ったのは85歳の春であり、『大疑録』が成ったのはその夏のことであり、実に死の2か月前であった。

こうして努力につぐ努力の生涯を送った益軒にも、とうとう終焉の時がきた。正徳3（1713）年12月、39歳で結婚して以来、40余年間琴瑟相和した東軒夫人が64歳で逝くと、そのあとを追うようにして、正徳4（1714）年8月27日、寅の刻を以て眠るが如くその生涯を閉じたという。享年85歳。益軒の辞世の句に寄せたアストンの英訳は実に名訳というべきである。

<i>"The past</i>	越し方は
<i>Seems to me</i>	一夜ばかりの
<i>Like a single night:</i>	心地して
<i>Ah! the dream</i>	八十路あまりの
<i>Of mere than eighty years!"</i>	夢を見しかな

「益軒先生伝」の著者で益軒の高弟竹田定直は、「先生謝世の言、微しく悲哀の音を含むに依って、終始真理を信じ且つ守りて自ら欺くこと勿らしむことを期したる先生の本領と真面目とを見る。先生の終は真に是れ哲学者の終なり。」（全集：巻1，70-71）と結んでいる。

## VI 貝原益軒の本懐たる道德教育論の特質

益軒が平仮名で道德教育論を執筆するに至った信条を、『慎思録』の自己編において次のように述べている。「吾が曹愚昧にして生を虚しくして身を終わること奈何ともする能はず。罪を逃るる所無し。聖人の遺書を読むと雖も、躬行する能はず。不肖亦言ふに足らず。況や聖人の遺書を補ふは是れ賢者の事愚者誠に作し得べからず。唯国字の小文字を編録して以て漢字を識らざる人、及び小児の輩を曉さんと欲す。民用に小補有るに庶幾すのみ。」（全集：巻2，122）

こうして益軒は、漢字を知らない人のために聖人の道を教えることに儒者としての自らの存在意義を見いだしたのである。

益軒の道德教育論の発生と儒学の研鑽の深い関わりについて考察したのであるが、もう一つ道德教育論の根源にある報恩思想について究明する必要がある。彼は「人となるもの天地の恩を知らずんばあるべからず。恩を知るを以て人とす。恩を知らざるは禽獸と同じ。恩を知ると知らざるは人と禽獸とのわかるる所なり。」(全集：巻3, 2)という。なぜなら「凡そ人となれる者は、父母これをうめりといへども、基本をたづぬれば天地の生理をうけて生る。・・其上むまれて後父母の養を得て生長し、君恩をうけて身を養ふも、基本をたづぬれば、皆天地の生ずる物を用ひて食とし、衣とし、家とし、器として身をやしなふ故に、およそ人となれる者は、はじめ天地の生理をうけて生るのみならず、むまれて後身をおはるまで、天地の養をうけて身をたもつ」(全集：巻3, 2)ものであるからである。

では天地の恩に報いるにはどうすればよいのであろうか。

『慎思録』巻之五には次のように述べている。「人は天地の生育の徳を資て生る。是れ誠に極り罔きの恩なり。須らく徳に報ひる所以を知るを要すべし。苟も之に報ひる所以を知らざれば、此れ則ち天地の不肖の子、頑愚の人と謂ふべし。然れば則ち何を以て徳に報ひん。曰く、仁心を存す。是れ乃ち天地の徳に報いる所以なり。仁心を存するとは即ち是れ人倫を厚くし、品物を愛する所以なり。」(全集：巻2, 93)と述べている。

益軒にとっての仁心を実践することとは、人に益あることをすることであり、それは自ら生涯をかけて厳しく研鑽を積んできた儒学の教え、すなわち聖人の道を童蒙民俗のために平仮名で分かりやすく説くことであった。致仕後には漢籍に関する著述は一切行わなかった。益軒の道德教育論の誕生について、益軒の唯一の高弟竹田定直は『文訓』の序で次のように述べている。

「凡先生著述を好み給ふ事、ひとへに人を愛し、俗をあはれむの仁心より出て、一念も名に近き給ふ意なし。・・・85歳にして箕を易給ふ迄、孜々として倦給はず。先生の志仁にして且謙なる事、誠にかくのごとし。」(全集：巻3, 319-320)

以上の考察から分かることは、貝原益軒が生涯にわたって探究したことは人間としての最高の徳を身につけ、人々や事物に有益なことを実践することであった。儒学の研鑽の途次において朱子学をも疑ったのは、純粋な儒学とはいえないと考えたからであった。このような鴻儒が致仕後に選んだ道は、児童や庶民の人間形成に役立つ道であった。それが道德教育論を著して広く社会教育に貢献するという本懐であった、と考えられる。

## おわりに

本稿は、外国人として貝原益軒について研究した最初の人物と考えられる、英国人外交官W.G.アストンが著した“A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE”『日本文学史』を資料として、アストンが高く評価した益軒の道德教育論を明らかにしようとした。アストンが指摘した益軒の質の高い道德教育論は、いかなる儒学理解から生み出されたのかを明らかにするために、

益軒が儒学研鑽の純粹性を求めて、学問による儒学の学派を開く道とは決別し、郷里の児童や庶民のために平仮名による聖人の道を解説する教育者<sup>3)</sup>としての道を本懐とするに至った。この背景には益軒が儒教の根本思想である仁の実践躬行に努めたこと、と万物への報恩思想があったことが特色として指摘できることを論述した。

## 【注】

### 1) 英国人外交官W.G. ASTONの略歴

William George Aston (1841-1911) は、天保12年4月9日に愛耳蘭度ロンドンデリー付近に生まれ、明治44年11月22日にサウス・デューヴォン州ビーヤに71歳で歿した。

アイルランド、ユニテリアン教会の牧師ジョージ・ロバートの子で、幼にして家学を受け、19歳(1860)のときクイーンズ大学に入り、22歳で優秀な成績で卒業し、翌年博士の学位を修得した。元治元(1864)年、24歳で江戸駐在英国公使館勤務を命ぜられ、日本語通譯生となり、同年秋、来朝就任した。外交官としてのアストンは、公使パークス Parks を助け、英本国をしてその方針を誤らしめなかったのは、日本に関し該博にして、徹底した研究があったためである、と高く評価されている。1902年に日英同盟を結んだ両国民は、相互理解を深める上でアストンの日本研究並びにその紹介に基づくものが多かったと言われている。

真摯な学徒として、アストンは日本の文学、歴史を研究し、創見に富んだ正確な研究成果を発表した。当時において外国人が日本語を学習することは非常に困難であったが、彼は刻苦精励よく日本語に到達していた。アーネスト・サトウの祝詞、チェンバレンの古事記、アストンの日本書記と並び称されている。彼は『日本書紀』の英訳や『日本文学史』、『日本語文法』、『神道』などを著した。当時、江戸の公使館にはアーネスト・サトウも同じく館員として勤務していた。

在任中、31歳でベルファストのスミスの女、ジャネットと結婚した。1875(明治8)年書記官補、明治17年朝鮮総督領事となって京城に赴任。1886(明治19)年東京駐在英國公使館勤務、書記官に転じ、1889(明治22)年49歳の時辞任し、帰国した。名誉文学博士号が授与された。

アストンが日本で収集した日本関係資料約9500点は1912年にケンブリッジ大学に収蔵されるに至った。『来日西洋人名事典 増補改訂普及版』1995、日外アソシエーツ、p.4を主に参照した。

### 2) 貝原益軒研究の背景

筆者は卒業論文「貝原益軒に見る儒学の教育理論への具体化」(1972)において、「儒教と教育」の関係を貝原益軒の教育論を通して明らかにしようと試みた。その研究成果を土井進(1984)「貝原益軒—子女の教育法を説いた『和俗童子訓』の著者—」唐澤富太郎編著『教育人物事典』上、pp.148-152、と題して発表したのを最後に、今日まで貝原益軒の研究を深めることができないままできた。

中学校社会科教師であった筆者は、自らの資質能力の向上を目指して、高田豊寿先生(1912-1989)が生涯に約1,200回主宰された「周禮研究会」に120回通い、先生の警咳に接した。ある時、貝原益軒が話題に上ったので、高田先生に筆者が卒論で益軒に取り組んだことを報告した。すると即座に「その卒論の指導はどなたがなさったのですか?」と聞かれた。「東京教育大学の唐澤富太郎教授です。」と答えると、「そうですか。東京教育大学というのは、そういう研究をしなければならない大学です。」と感慨深げにおっしゃった。そして、高田先生から英国人外交官W.G.アストンが貝原益軒を高く評価していることを初めて聞いた。後日、高田先生からW.G. ASTON (1899) “A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE” をいただいた。1984(昭和59)年5月26日のことであった。

筆者は、「教育学概論」の非常勤講師として4年間、総合福祉学部の学生と真剣に学び、「淑徳大・生実

町プレーパーク」を2年間開設するなど、とても有意義な機会をもつことができた。平成29年度が最後となったのを機会に、千葉キャンパスに通って学んだ証として、アストンが高く評価している貝原益軒の道德教育論について究明しようと考えた。

- 3) 貝原益軒は学者としての道だけでなく、最終的には教育者としての道において大成したというべきであろう。江戸時代においては、人をして人たらしめる「教育」という言葉はほとんど使われず、代わりに「学問」や「為学」、あるいは単に「学」という言葉が、ほとんど「教育」と同じ意味に使われている。学問が一部の人のためのものではなく、すべての人が学ぶべきものと考えられるようになってきた。益軒も「群生の中人と為ること難しと為す。且つ再び生ること能はず。・苟も人と為りて人道を聞くこと能はざれば、長生不死と雖も、空過と為す。然らば人と為りては則ち須らく道を聞くことを要むべし。道を聞くの工夫、又唯能く学ぶに在るのみ。」(全集：巻2, 7)

と述べて、人として生まれたからには学問して人の道を学ぶべきであると言っている。また、『慎思録』巻一の巻頭の一文は、人間として生まれたからには、学問、すなわち教育が必要であるということ述べていたものとして有名である。

「人生れてまなばざれば生れざると同じ。学んで道を知らざれば学ばざると同じ。知って行ふこと能はざれば知らざると同じ。故に人たるもの必ず道をしらざるべからず。道を知るもの必ず行はざるべからず。」(全集：巻2, 2)

さらに益軒の次の言葉は、学問するとは人たることを学ぶことであり、それは人間をして人間にまで進める教育に外ならないことを述べていたといえよう。

「学とは何ぞや、人たるを学ぶ所以なり。人は固より人なり。何故に人たるを学ぶか。人の道を知らざれば則ち禽獣に近し。以て人と為すべからず。是を以て人たるを学ぶなり。」(全集：巻2, 357)

と。このように益軒は学問、すなわち教育は、人と生まれた者が、人たることを学ぶために必要なものであるとしている。これは近世以前においては、学問とは専門の学者を育成することのみが目的と考えられたのに対し、学問とは人たることを学ぶものであり、すべての人にとって必要なものであるとするのである。ここに「学問」が、人をして人たらしめる「教育」という意味に用いられていることが分かる。

しかも、益軒においては、学問の内容は儒学を意味するものであるから、益軒は儒学にもとづいて道德教育論を具体化したものと考えられる。

## 【参考文献】

Aston, W.G. (1899) *A History of Japanese Literature*. CHARLES E. TUTTLE COMPANY.

石川謙 校訂 (1991) 『養生訓・和俗童子訓』 岩波書店。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之一「益軒先生年譜」』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之一「益軒先生伝」』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之二『大疑録』』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之二『慎思録』』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之二『初学知要』』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之三『和俗童子訓』』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之三『神祇訓』』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之三『初学訓』』, 益軒全集刊行部, 隆文館。

貝原益軒 (1911) 『益軒全集 巻之三『文訓』』, 益軒全集刊行部, 隆文館。